「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
――「人文学フィールドワーカー養成プログラム」の発展に向けて

周 藤 芳 幸　　取組実施担当者（西洋史学）

研究科の総務委員を務めていた関係で，思いがけなく「魅力ある大学院教育」イニシアティブの取組実施担当者という大役を拝命してから，まもなく 2 年が過ぎようとしている。これまでのわが国における大学院教育改革の流れをレビューするとともに，諸外国（とりわけ個人的に研究上の交流があったアメリカとイギリス）の大学院教育に学びながら名古屋大学文学研究科の特色を活かすことのできるプログラムとして構想した「人文学フィールドワーカー養成プログラム」は，平成18年度に厳しい競争をくぐり抜けて採択されたものの，そこに込められた理念を実行に移していく過程では，さまざまな困難の波にもさらされることになった。それを乗り越えて一定の成果をあげることができたのは，ひとえに町田健研究科長をはじめとする同僚の方々からの暖かいご理解とご支援の賜物であり，ここに取組実施担当者として心から感謝の意を表したい。

このプログラムの趣旨については『メタプティヒアカ』創刊号所収の拙文を参照していただきたいが，その要点のみを述べるならば，「人文学フィールドワーカー養成プログラム」は，自らの身体によって知を体系化することのできる自立した研究者の養成を目的として，現場での調査や史資料の収集行為（これをこのプログラムでは広義のフィールドワークとみなしている）の方法論を大学院の教育課程に位置づけるとともに，大学院生による優れた実地調査プロジェクトに対して必要な経済的支援を行うことをその骨子としている。その発想の原点にあったのは，担当者が大学院生の頃からギリシアやエジプトのフィールドで味わってきた身の震えるような発見の感動を，一人でも多くの学生に体験してほしいという思いだった。実際には，プログラムの実施にあたって，これがどこまで文学研究科で学ぶ大学院生の心を惹きつけ，学位論文の執筆に役立ててもらえるのか，不安がなかったわけではない。しかし，いざモデル事業を立ち上げ，調査実習プロジェクトを公募してみると，すぐにこのプログラムが大学院生の潜在的なニーズに応えるものであることが明らかになった。本誌に収められた多岐にわたる活動報告からも，調査に際して現場で生の史資料に触れることのできた大学院生たちの喜びがひしひしと伝わってくるであろう。

このプログラムのもう一つの柱である教育研究推進室を核とする大学院教育の組織的展開の強化という側面では，今年度も多くの関係者のご尽力によって充実した企画を実施することができた。活動記録の詳細については本誌の末尾の表をご覧いただきたいが，これらが滞りなく開催できたのは，ひとえに室長を務められた天野政千代教授（18年度）と神塚淑子教授（19年度），及び事務を担当していただいた後藤美紀さんと北村陽子さんのおかげである。平成19年度の大学院設置基準改正によって，大学院では「授業・研究指導の改善のための組織的な研修・研究の推進」が義務化されることになったが，教育研究推進室ワークショップの開催状況は，本研究科がこれらに真摯に取り組んでいることを証言している。

文学研究科では，平成19年度に佐藤彰一教授を拠点リーダーとするグローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」が採択されるなど，人文学の国際的な教育研究拠点構築への歩みがたゆむことなく続けられている。平成20年度からは部局独自の取組となる「人文学フィールドワーカー養成プログラム」もまた，今後ますますその内容を充実・発展させることにより，言葉の真の意味で（すなわち文学研究科で学ぶ大学院生にとって）魅力ある大学院教育プログラムへと成長することを祈念する次第である。